

令和5年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

幼保連携型認定こども園における乳幼児期の育ちや学びの連続性を、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」を踏まえた視点で捉えた教育課程の編成や、教育及び保育の質と教職員の資質向上に関する研究開発

2 研究の概要（別紙1：研究概要図）

本研究は、幼保連携型認定こども園の特色を生かして、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂で重要視される0歳から5歳までの育ちや学びの連続性を図り、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関連を考慮した教育課程の編成や指導計画、指導等の工夫を行うものである。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を、幼児の育ちの読み取りや保育改善に生かしてカリキュラムマネジメントを実施し、教育及び保育の質の向上に向けての研究開発に取り組んだ。3、4、5歳児の連続性のある教育課程の編成を行い、3歳児への連続性を意識した0、1、2歳児の教育課程を編成し、カリキュラムを作成した。5歳児においては、小学校教育への接続を意識した取組も行い教育目標の実現を目指した。

さらに、研修時間の確保や教育及び保育の質等が課題となる認定こども園における教職員の資質向上に向けた取組を工夫した。

3 研究の目的と仮説等

（1）研究の目的

① 乳幼児期の育ちや学びの連続性を、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた視点で捉えた教育課程の編成及び指導計画の作成と保育の充実

改訂された幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、保育指針では、今まで「心情・意欲・態度」で捉えていたねらい及び内容に加えて、新たに「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力の基礎」「学びに向かう力、人間性等」という3つの資質・能力を明記された。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、幼児教育において育みたいこの資質・能力が育まれている姿を具体的に示したもので、主に5歳児後半に見られるようになる姿であるが、乳幼児期から年齢に応じて、発達していく方向を見通し、各段階に相応しい指導を積み重ねることが大切である。

本研究は、5領域のねらいや内容に基づいた保育を重ねながら、幼児の育ちや学びを各領域のねらい及び内容とともに「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点からも読み取り、一人ひとりの発達に必要な体験や学びが得られるように教育課程の編成等を行うことを目的とした。幼保連携型認定こども園の特色を生かして、0歳児から5歳児までの育ちや学びの連続を図る教育課程の編成、指導計画の立案、ねらい及び内容の設定、環境構成の工夫等により、主体的な活動を促し確かな力を育む保育に取り組んだ。

② 教職員の資質向上

時間シフトで動く認定こども園では、研修時間の確保と保育者の資質向上が課題となっている。「教育は人なり」と言われるように、教育の成否は保育者の力量に負うところが大きい。保育者の多様な勤務形態等を踏まえ、効果的、効率的な取組を工夫することにより、保育者の力量形成を図った。湖東学園の幼保連携型認定こども園4園の保育者が学び合う研修の持ち方、保育の視点をもった保育実践と評価を行い、保育力の向上や協働の意識を育んだ。

教育課程の編成及び保育を通したカリキュラムマネジメントと保育の質及び教職員の資質向上は、相互に働き合う関係にあり、教育課程の編成及び指導計画の作成、保育実践を通して自身の保育を見つめ直し、保育改善に努めることが、力量形成や保育の向上につながると考えた。

(2) 研究仮説

- 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点を踏まえて幼児の学びを捉え、0歳児から5歳児までを見通した教育課程を編成して、指導法や環境構成、援助、記録の取り方を工夫すれば、幼児の健やかな成長につながるだろう。
 - ・ 幼児の学びを5領域のねらい及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点から捉えた教育課程を編成する。0、1、2歳から3、4、5歳までの育ちや学びの連続を図る教育課程の編成、指導計画の作成及び保育の工夫、改善を図る。
 - ・ 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点から幼児の育ちを読み取り、教育課程及び保育の充実を図る。
- 幼保連携型認定こども園における研修内容や研修方法等を工夫して教職員の認識や保育力を深めていけば、教育及び保育に関する資質・能力が高まるだろう。

(3) 教育課程の特例 無し

(4) 研究開発にあたり配慮した事項

【教育課程の位置付け】

幼保連携型認定こども園教育・保育要領、幼稚園教育要領、保育所保育指針の改訂では、「幼児教育において育みたい3つの資質・能力」が明示され、この「資質・能力」が具現化された姿として「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（以下、本文中では「10の姿」）が示された。さらに、入園から修了までの幼児の園生活全体を捉えた「全体的な計画」の作成が位置付けられた。この全体的な計画には、満3歳以上の幼児の教育課程に係る教育活動のための計画、0歳から小学校就学までの保育を必要とする幼児の保育時間の計画、学校安全計画、学校保健計画、保護者に対する子育ての支援に関する計画等が含まれる。

本研究に係る教育課程は、「全体的な計画」の中にあり、3歳以上児の「教育課程に基づく教育活動のための計画」、3歳未満児は「保育のための計画」に位置付けた。また、3歳未満児は、「保育のための計画」の教育の部分に焦点を当て、「教育課程」と表現した。幼児の発達を見通して、「3つの資質・能力」「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」「5領域のねらい、内容」を関連付けながら編成し、教育課程を具体化した長期、短期の指導計画においてもそれぞれの計画での関連を図った。「養護」に関しても、教育課程の区分で計画を作成し、指導計画に位置付けた。そして、本園教育目標の実現を目指し、養護の行き届いた環境を園生活の基盤として、教育及び保育を展開することに留意した。

3 研究内容

(1) 教育課程の内容（編成順）

① 3歳児、4歳児、5歳児の教育課程の編成と指導計画

教育課程を5領域の視点から編成する

1年次、教育課程（試案）を、「人との関わり」「ものとの関わり」「こととの関わり」から編成した。年間を4期に分け、それに基づいて月別指導計画を作成し、実践を行った結果、「教育・保育要領で目指す5領域の視点が曖昧である。指導計画のねらいや内容が抽象的であるために、保育を通して子どもたちに何が育ったのかという評価の観点が捉えにくい。そのため、翌月への改善につながりにくい」という課題が明らかになった。そこで、2年次、教育課程を5領域の視点から改編した。

教育・保育要領に示された各領域のねらい及び内容をもとに、本園の幼児の実態を踏まえて園独自の事項を加え、学年別に具体化したねらいと内容を設定し、年間を4期に分けて期別のねらいと内容を設定した。期別の教育課程は、「年間を通して達成を図るもの」と「期別で達成するもの」で構成した。

保護者を対象に実施した「心と体の育ちに関するアンケート」や幼保小の連絡協議会からも情意面の育ちに課題が見られたことを反映し、次の「内容」を園独自に設定した。

《健康》 (5歳児) 失敗したり嫌なことがあったりしても、くじけずに行動する

《人間関係》 (3歳児) なにかしてもらったらお礼を言う (5歳児) 自分たちのためにしてくれていることに感謝の気持ちをもち、自分も何かしようという気持ちをもつ

表1 教育課程「3歳児 期別の教育課程」

年間を通したねらいとして達成を図るもの				
	「健康」 ・自分なりのペースで、落ち着いて行動する ・危ない場所や行動が分かる	「環境」 ・使うものや作ったものを大切にしようとする ・数や量を数えたり比べたりすることに興味を持つ ・簡単な製作や生活習慣に必要な技能を身に付ける	「人間関係」 ・園生活の中で、「こんな時はこうしよう」と考えて行動する	「言葉」
	I期 (4月～5月)	II期 (6月～9月)	III期 (10月～12月)	IV期 (1月～3月)
ねらい	「健康」 ・保育者に親しみ、安心感を持って生活する ・みんなで一緒に食べる楽しさを味わう ・生活の仕方が分かり、身の回りことを自分でしようとする 「人間関係」 ・先生や友達と過ごす喜びを味わう	「健康」 ・戸外で体を動かして遊ぶ楽しさを味わう ・いろいろな活動に自分から取り組もうとする ・遊びを楽しみながら、好きなことに挑戦しようとする ・夏の生活の仕方を知り、自分でやってみようとする	「健康」 ・体を動かして、様々な活動に取り組む楽しさを味わう ・季節の変化に応じた生活習慣を身に付けて思い通りにいかなくても、もう少しやってみようとする ・遊んだ後は片付けることの大切さが分かる	「健康」 ・冬の寒さに負けず、戸外で思い切り体を動かして活動しようとする ・冬の生活の仕方を知り、身の回りのことを自分から取り組もうとする ・進級することに期待を持ち、様々な活動に意欲的に取り組む
内容	「健康」 ・先生に親しみを感じ、信頼感を持つようにする ・保育者に手伝ってもらったり、見守られたりしながら、身の回りすることを自分からする ・登園から降園までの園生活のリズムに	「健康」 ・全身を使って、色々な動きをする楽しさを味わう ・十分に体を動かして遊ぶ楽しさが分かる ・夏の生活に必要なことが分かり、自分でやろうとする (衣服の調節、汗を拭く、活動後の休息)	「健康」 ・走る、跳ぶ、登る、固定遊具で遊ぶなど、伸び伸びと全身を動かして遊ぶ ・手洗い、うがい、衣服の調節を自らする ・遊んだ後は、自分から元の場所に片付けようとする	「人間関係」 「健康」 ・寒くても、友達を誘って積極的に外に出て遊ぼうとする ・手洗い、うがい、衣服の調節等の習慣を身に付ける ・生活の流れを意識しながら、出来るようになった事を自分でしようとする

＜月別指導計画作成の基本方針＞

- ・ねらいと内容は、学年別、期別の教育課程に基づいて、各学年の子どもの平均的な発達の姿に基づいて具体的に設定する。
- ・月別のねらいと内容は領域別に示し、原則として各月とも1領域1項目とする。必要な場合には1つの領域に2つのねらいと内容を設定したり1つのねらいに2つ内容を設定したりする。
- ・月末に子どもの姿をもとにねらいと内容の達成状況を把握し、翌月のねらいと内容に生かす。

月別指導計画の作成及び実践および反省と評価を通して、P（ねらい、内容に基づく環境構成、援助の計画）D（保育実践）C（評価）A（改善・翌月の計画）のマネジメントサイクルが、保育者に定着した。週案、日案についても同様の考え方で実施した。

② 2歳児の教育課程の編成と指導計画

教育課程を期別で編成し、月齢に配慮する

2歳児の教育課程は、2歳児の発達と3歳児への接続と発達を踏まえ、4期に区分し、5領域の視点から編成した。2歳児学級には、4月当初、2歳0ヶ月～2歳11ヶ月の幼児が在籍し、生まれ月等による個人差が大きいと、4月から9月生まれの幼児を対象にしたI期からIV期までの教育課程を編成し、これとは別に、I期とII期については、10月～3月生まれの幼児を対象にした教育課程を編成した。III期、IV期は、生まれ月に関わらず同じねらいと内容であるが、個人差には十分配慮した（表2）。II期の領域「健康」に関するねらいを例に挙げると、4月から9月生まれは「全身を使う遊びに挑戦しようとする」としたのに対し、10月から3月生まれは「いろいろな体の動きを楽しむ」とした。「養護」に関しても、「生命の保持」「情緒の安定」のねらいと内容を期別で設定し、指導計画に位置付けた。0歳児、1歳児も同様である。

表2 2歳児の教育課程の構成

		I期 (4月～5月)	II期 (6月～9月)	III期 (10月～12月)	IV期 (1月～3月)
4月～9月 生まれ	ねらい ・内容	分けて設定	分けて設定	同じねらい ・内容を設定	同じねらい ・内容を設定
10月～3月 生まれ	ねらい ・内容	分けて設定	分けて設定		

指導計画（月別指導計画、週案、日案）においても、表2に基づいてねらいと内容を設定し、経験させたい活動、環境構成と援助を立案した。発達に応じたねらいと内容を設定して保育を行うことにより、幼児の興味・関心に対応した適当な保育につながり、活動や学びが広がるようになった。

＜指導の工夫＞

こども園にしばらくは2歳児学級が2クラスある。より発達に沿った保育を行うために、3年次は、2歳の幼児を「すくすく組」、満3歳になった幼児を「もみじ組」として保育を行った。I期とII期は、「もみじ組」は4月から9月生まれの教育課程、「すくすく組」は10月から3月生まれの教育課程に基づいて保育を行い、III期、IV期は、発達の状況と年少組での保育を見通して、同じ教育課程と指導計画のもと合同保育を行った。4年次は、様々な個性や特性を持った幼児が刺激し合いながら成長することを目指して、月齢を分けずに2学級を編成し、保育を行った。それぞれの成果と課題が明らかになった。詳細は実施報告書で述べる。

③ 0歳児、1歳児の教育課程の編成と指導計画

教育課程を月齢で編成する

0歳児の教育課程は、「健やかに伸び伸びと育つ」「身近な人と気持ちが通じ合う」「身近なものに関わり感性が育つ」の視点からねらいを設定し、内容は3ヶ月毎に区分して設定した。

1歳児の教育課程は、5領域からねらいを設定し、内容は3ヶ月毎に区分して設定した。

<指導計画>

0歳児学級で満1歳を迎えた幼児については、1歳児の教育課程に基づいて月別指導計画を作成した。1歳児学級においても、満2歳を迎えた幼児については2歳児の教育課程I期（9月～12月生まれ）を参考にして作成した（表3）。その際、2歳児の教育課程をそのまま当てはめるのではなく、参考にしながら1歳児学級としてのねらいや内容を設定することにより、2歳児の前倒しの指導計画とならないよう配慮した。

表3 「0歳児、1歳児の教育課程と指導計画の関連」

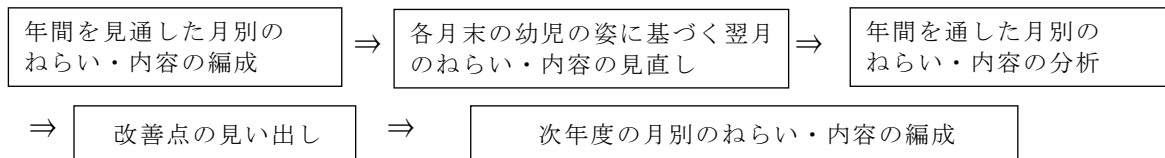
	0歳児教育課程			1歳児教育課程			2歳児教育課程				
	3ヵ月～6ヵ月	7ヵ月～9ヵ月	10ヵ月～1歳未満	1歳～1歳3ヵ月	1歳3ヵ月～1歳6ヵ月	1歳6ヵ月～1歳9ヵ月	1歳9ヵ月～2歳未満	2歳～2歳3ヵ月※参考 (9月～3月生まれ)	2歳3ヵ月～2歳6ヵ月※参考 (4月～8月生まれ)	2歳6ヵ月～2歳9ヵ月	2歳9ヵ月～3歳未満
0歳児学級	→										
1歳児学級				→							
月 齢	3ヵ月～6ヵ月	7ヵ月～9ヵ月	10ヵ月～1歳未満	1歳～1歳3ヵ月	1歳3ヵ月～1歳6ヵ月	1歳6ヵ月～1歳9ヵ月	1歳9ヵ月～2歳未満	2歳～2歳3ヵ月	2歳3ヵ月～2歳6ヵ月	2歳6ヵ月～2歳9ヵ月	2歳9ヵ月～3歳未満

月別指導計画には、在籍児の氏名を記載し、保育後、「子どもの活動」欄に挙げた各事項に育ちが見られた幼児の氏名を記入した。その月の評価を翌月の指導計画の作成に活用することができ、指導と評価の一体化につながった。

(2) 教育課程、指導計画の見直し

① 月別指導計画のねらいと内容を「10の姿」の視点等から分析

年間の月別指導計画のねらいと内容が、発達段階を踏まえた系統性のあるものであるか、その内容は適切であったか等を検討し、改善につなぐ。編成の手順と視点は、以下のとおりである。



【月別のねらい・内容の分析の観点】

2歳児、3歳児、4歳児、5歳児の月別のねらい、内容を次の観点から分析した。

- 必要なねらいと内容がバランスよく設定されているか
- 発達及び各領域のねらいと内容に対応したねらいと内容になっているか
- ねらいと内容が対応しているか
- ねらいと内容に継続性と発展性があるか

年間の月別指導計画のねらい及び内容に記述されたものを「10の姿」の視点から整理し、分析した。表4は、3年次の結果である。前年度と比較して全体としては年齢や期の発達に対応したねらいと内容を設定していたが、下の学年や同一学年で既に設定されているねらい、内容と似通ったものや、ほぼ同一のねらいと内容が繰り返し設定されているものがあり、修正を加えた。

表4 R4 月別指導計画 年間のねらい・内容「10の姿」の集計

10の姿と内容	年齢			計	10の姿別計
	3	4	5		
(2) 健康な心と体	① 安定感・充実感を持つ	1	0	0	1
	② 見通しを持って行動する	0	0	2	2
	③ 心と体を十分に働かせる	5	7	6	18
	④ 健康で安全な生活を作り出す	4	0	2	6
(2) 自立心	① しなければならないことを自覚する	1	0	0	1
	② 自分の方で行動する	4	0	0	4
	③ 嫌わずにやりとげる	0	3	3	6
	④ 自信を持って行動する	0	0	0	0
(3) 協同性	① 思いや考えなどを共有する	5	2	1	8
	② 共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりする	1	4	5	10
(4) 道徳性・規	④ してよいことや悪いことが分かる	2	0	0	2

② 発達別の「マンスリー・エピソード」による見直し（自己評価書に記載）

(3) 子どもの育ちを読み取る力を育てる可視化した保育記録（以下、「幼児」を「子ども」とする）

① 個に焦点を当てた保育記録「エピソード記録」

エピソード記録は、保育場面で心に残った子どもの姿を、個人に焦点を当てて読み取った記録である。遊びの中の豊かな活動や子どもの思考、固有の発達等を具体的に捉えて分析し、育ちや学びを他者に伝えるように画像を入れて記載した。エピソード記録の効果として、学級の子ども全体として捉える保育から個人の成長や発達に目を向けた保育に変容した。子どもの育ちや学びを読み取る視点が多様になり、

育ちの確認表」を作成した。弾力的に取り扱いながら育ちの状況を把握して、保育に生かした。

(5) 小学校との連携・接続

幼児教育から小学校教育への円滑な接続を図るためには、幼児教育、小学校教育を相互に理解し、見通しをもって教育課程を編成して教育、保育に当たることが大切である。教育・保育要領や「幼保小の架け橋プログラム」等に示された内容を踏まえ、次の点に取り組んだ。

表7「幼児期の終わりまでに育って姿」育ちの確認表（5歳児）

項目		A	B	C	D	E
10の姿 健康な 心と体	・体を動かすことが好きで、いろいろな運動遊びに目標を持って挑戦する					
	・活動や時間に見通しを持って行動する					
	・基本的な生活習慣が身に付いている（椅子に正しい姿勢で座る、後片付け 食事のマナー等） ・危険な行動をせず、安全に気を付けて生活する					
自立心	・人に頼らずに、できることは自分でする					
	・自分で考え、自分で判断して行動する					
	・自分に自信を持って行動する					

① 小学校教育の基盤となる5歳児の保育 ～連続性を意識して～

保育者が、小学校1年生の各教科等の学習指導要領や教科書にも目を通し、保育を通した育ちや学びが小学校にどのようにつながるかという見通しをもって、意図的に環境を用意したり場を捉えて援助したりした。子どもの育ちを教科等の視点からもとらえ、学びの連続性に留意した保育を展開した。

しかし、決して小学校教育の前倒しや準備教育を行うことではない。（具体例は、自己評価書参照）

② 育ちと学びをつなぐ小学校との連携

ア 園と小学校との連絡協議会

接続期の教育を充実させるために、5歳児が多く就学する熊本市立の小学校2校と協力し、協議の場をもった。「10の姿」から子どもの成長を捉えるための視点を園から明示し、次の点について協議を行った。

- ・「10の姿」等から見て、本園の卒園児が育っていると思われる点
- ・「10の姿」等から見て、さらに育てるべきだと思われる点
- ・こども園で経験させておきたい事項（3つの資質・能力、「10の姿」の視点から）
- ・就学前の園からの引き継ぎの効果

イ 幼児と児童との交流

互恵性のある活動となるように、事前に双方が指導案を作成して交換し、幼児と児童の交流活動を実施した（3年次）。他校からはコロナ禍に配慮して学校紹介のビデオレターが届き、保育に活用した。

(6) 教職員の資質向上に向けた取組

時間シフトで動き、保育者の退職、採用も複数ある認定こども園では、研修時間の確保と保育者の資質向上が課題である。そこで、4園の関係者が集合しての研修と各園での実践を組み合わせ、OJTでの資質・能力の向上を目指した。以下、資質向上に向けた取組について報告する。

① 研修の工夫

(ア) 研修時間の工夫

- ・1号認定の子どもが降園した15:00以降に1時間程設定する。研修中は、研修に参加しない保育者が交代で縦割り保育や合同保育を行い、他の教職員が安全管理を行う。
- ・指導計画等の作成は、2号認定、3号認定の子どもの降園が始まる16時頃からの時間を活用する。
- ・合同研修は、土曜日の勤務を調整して学期1回程度行い、共通実践につなぐ。
- ・研究保育は学年単位で行う。
- ・1ヶ月単位の変形労働を取り入れ、研修に参加する保育者の勤務時間調整を行う。

(イ) Web サイト（イントラ）の活用

4園でイントラを組み、共有ドライブに4園の指導計画や研修記録、指導案、資料、動画等を掲載して、誰もが各園からアクセスして閲覧できるようにした。他園の保育者と情報交換、他園の取組を自身の指導計画や保育、保育記録の参考にする等、資質向上に有効に働いた。

(ウ) Zoomを活用した on-line による研修会

コロナ禍への対応と4園からの集合時間の短縮のための取組である。県外講師の指導をタイムリーに受けることができるという効果も得られた。ただし、対面で互いの顔を合わせて協議することの意義は大きく、両者を組み合わせる必要性が明らかになった。

② 保育力を高める取組

教職員全員の保育に対する意識改革から始めた。研究に取り組む前の園の保育は、雨の日は汚れるか

ら外に出ないといった活動の制限や保育者の先回りの指示等が多く見られた。そこで、保育者中心の保育から環境を意識した子ども主体の保育（集める保育から集まる保育）へ、活動中心の保育からねらいを意識した保育への転換を図った。また、学年別研修や合同研修で教育課程を踏まえた指導計画の作成や子どもの育ちを確かにする保育について共通認識を図り、研究保育等で保育力を高めた。

研究保育では、保育参観、研究協議の視点を持ち、KJ 法等を取り入れて研修を重ねた。教育課程を意識した子ども主体の保育が浸透してきた。研究保育は、OJT で保育力の向上を図る上で大変有効であり、保育カンファレンスを丁寧に行うことが、力量形成につながる事が明らかになった。

【子どもの育ちを確かにするための保育の視点】

- (1) 子どもが経験を継続的、発展的に積み上げていく保育を創る
- (2) 子どもの発達していくプロセスを具体的に把握し、指導計画を立てる
- (3) 指導計画に発達段階を踏まえた具体的な「ねらい」と「内容」を設定し、ねらいと内容を意識した保育を実践する
- (4) 子ども一人一人の思いや、どのような体験を積み重ねているか、学びや発達の姿を「10 の姿」の視点で読み取り、指導計画に反映させるカリキュラムマネジメントを行う
- (5) 子どもの豊かな体験を促し、子どもが自ら主体的な活動を展開して学びを深めていくような環境を構成する
- (6) 子どもが主体的に活動に取り組み、考えたり、試したり、工夫したり、活動を振り返ったりするように援助する
- (7) 発達に応じて子ども同士の対話を促すとともに、活動を振り返る場を設定して学びや意欲を高める
- (8) 保育者が子どものモデルとして、望ましい姿を見せる

(7) 研究の経緯

	実施内容等	
第一 年 次	<ul style="list-style-type: none"> ○ 3つの資質能力、「10 の姿」の趣旨及び内容、教育課程の意味、意義等の理解 ○ 3, 4, 5 歳児の教育課程（第1次試案）の編成 ○ 指導計画（月別指導計画、週案、日案）の見直しと形式、内容の改善 <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの育ちを、ねらい及び「10 の姿」の視点から読み取り、改善の視点を持つ ・指導計画を見直す視点の明確化 ○ エピソード記録、可視化した月別指導計画「マンスリー・エピソード」への取組の開始 <ul style="list-style-type: none"> ・記入後、省察して改善し、保育力の向上につなぐ ○ 保育中に見られた姿「10 の姿」を集約し、発達段階（3歳～5歳）で整理 ○ 保育力を高める研究保育（4園：計5回）の実施 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 研修体制の整備と有効性の確認（学年別研修、4園のイントラ整備等） ○ 先進校視察（お茶の水女子大学付属幼稚園） ○ 講師を招聘した研修の実施（研究内容、保育の充実、子どもの姿の読み取り方等） ○ アンケート調査の実施による実態把握と分析 <ul style="list-style-type: none"> ・県内の幼児教育施設保護者対象「幼児の心と体の育ち」（7月：47園2歳児～5歳児2004名） ・在園児の保護者対象「子どもの心と体の育ち」（7月：501名、2月：498名） ・教職員対象「子どもに育った『10 の姿』」「自分の保育力の変容」（2月：28名） ○ リーフレットを作成し、1年目の取組を熊本県内の幼児教育施設に配布
名 目 指 定 年 度	<ul style="list-style-type: none"> ○ 3, 4, 5 歳児の教育課程（第1次試案）の再編成（第2次試案編成） <ul style="list-style-type: none"> ・5領域の視点から教育課程を編成 ○ 指導計画（月別指導計画、週案、日案）の形式、記載内容の改善 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 保育力を高める研究保育の実施 ○ アンケート調査の実施と経年比較、分析 <ul style="list-style-type: none"> ・保護者対象「子どもの心と体の育ち」（8月：504名） ・教職員対象「子どもに育った『10 の姿』」「自分の保育力の変容」（2月：26名）
第 二 年 次	<ul style="list-style-type: none"> ○ 幼保連携型認定こども園教育・保育要領に基づく全体的な計画の作成 ○ 中教審答申「令和の日本型学校」「幼保小の架け橋プログラム」の理解 ○ 3, 4, 5 歳児の教育課程（2次試案）の検証と修正 ○ エピソード記録、可視化した月別指導計画「マンスリー・エピソード」の改善と充実 ○ 保育中に見られた「10 の姿」の集約と発達段階（3歳～5歳）での整理 ○ 研修体制の工夫・改善と研修の有効性を確認 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 保育力を高める研究保育の実施（4園：計9回） <ul style="list-style-type: none"> ・ねらい及び内容と経験した活動の適切性 ・主体的な活動の促し ○ Web 研究発表会の実施（2月26日） ○ アンケート調査の実施と経年比較、分析 <ul style="list-style-type: none"> ・保護者対象「子どもの心と体の育ち」2月：515名 / 「年長児『10 の姿』から見た成長」2月：156名 ・教職員対象「子どもに育った『10 の姿』」「自分の保育力の変容」（2月：28名）
第 三 年 次	<ul style="list-style-type: none"> ○ 3歳児との育ちの連続性を意識した2歳児の教育課程試案の編成、及び指導計画の作成・期別（I期～IV期）で編成 / 発達の開きに配慮し、I期・II期は10月から3月生まれを別に編成 ○ 3, 4, 5 歳児の教育課程（第2次試案）及び指導計画の検証と修正 <ul style="list-style-type: none"> ・期別の計画（I期～IV期）の編成 ・実践を通じた有効性の確認 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 保育力を高める研究保育の実施（4園：計8回） ○ 小学校との連携・接続 <ul style="list-style-type: none"> ・就学先の小学校2校との連絡協議会の実施 「10 の姿」の視点から見た卒園児の育ちや課題 / 幼児、児童との互惠性のある活動の実施 / スタートカリキュラムの紹介 ・小学校への接続を意識した保育実践 ○ Web 研究発表会の実施（2月25日）

	<ul style="list-style-type: none"> ○保育中に見られた「10の姿」の集約と発達段階（2歳～5歳）での整理、分析 ○「10の姿」の視点からの教育課程、指導計画、指導方法の改善 <ul style="list-style-type: none"> ・実証的なデータを基にした改善 / 発達別「マンスリー・エピソード」による育ちの連続性の検討 	<ul style="list-style-type: none"> ○アンケート調査の実施と経年比較、分析 <ul style="list-style-type: none"> ・保護者対象「子どもの心と体の育ち」 2月：451名 / 「年長児『10の姿』から見た成長」2月：151名 ・教職員対象「子どもに育った『10の姿』」「自分の保育力の変容」（2月：31名）
第四年次	<ul style="list-style-type: none"> ○2歳児への接続を図った0歳児、1歳児の教育課程の編成（月齢で編成）及び指導計画の作成 ○2歳児、3歳児、4歳児、5歳児の教育課程、指導計画の検証と修正 ○0歳児から5歳児までの教育課程の育ちや学びの連続性の確認 ○指導計画（各月のねらい、内容の連続性）の改善 ○保育力を高める研究保育の実施（4園：6回） ○小学校との連携・接続 <ul style="list-style-type: none"> ・就学先の小学校2校との連絡協議会の実施（8月、10月） 「10の姿」の育ちの視点を基にした協議 / アプローチカリキュラムの視点/5歳児の実践事例紹介 ・小学校への接続を意識した保育実践 	<ul style="list-style-type: none"> ○保育中に見られた「10の姿」の集約と発達段階（2歳～5歳）での整理、分析 ○アンケート調査の実施と経年比較、分析 <ul style="list-style-type: none"> ・保護者対象「子どもの心と体の育ち」11月：407名 / 「年長児『10の姿』から見た成長」11月：125名 ・教職員対象「子どもに育った『10の姿』」 / 「自分の保育力の変容」（11月：34名） ○今後の研究の方向性の確認 ○研究成果の発表 <ul style="list-style-type: none"> ・研究開発学校フォーラムにて発信（1月17日） ・公開研究発表会（2月23日）取組の成果と課題の整理

(8) 評価に関する取組

評価方法等	
第一年次	<ul style="list-style-type: none"> ○「10の姿」との関連を図った各発達段階（3歳～5歳）における教育課程試案、指導計画、ねらいや指導内容の適切性を、実践をもとに検証する。 ○運営指導委員会で意見を得、改善に生かす。 <ul style="list-style-type: none"> ・各発達段階（3歳～5歳）における教育課程/エピソード記録、マンスリー・エピソード等の保育記録による保育の質と教職員の資質向上 ○保育者の読み取りや保護者等へのアンケート調査、聞き取り等から明らかになった成果や課題を評価に生かす。 ○研修形態や研修内容について教職員への聞き取り調査や自己評価、保育記録の変化、日々の保育から資質向上の取組の有効性を検証する。
第二年次	<ul style="list-style-type: none"> ○再編した教育課程試案（3歳、4歳、5歳）、指導計画（月別指導計画、週案、日案）のねらいや指導内容の適切性を、実践をもとに検証する。 ○研修による教職員の資質向上の取組の有効性を、教職員への聞き取り調査や保育記録、日々の保育から検証する。 ○運営指導委員会で意見を得、改善に生かす。 <ul style="list-style-type: none"> ・教育課程（3歳～5歳）における連続性/「『10の姿』育ちの過程」/保育の質と教職員の資質向上への取組 ○エピソード記録、マンスリー・エピソードの分析・評価により、教育課程や指導方法等の有効性の評価を行う。 ○「幼児期の終わりに育ってほしい姿」の具体的な姿について評価する。 ○保護者対象の子どもの実態調査（「子どもの心と体の育ち」等）を、初年度との比較、分析を行う。 <ul style="list-style-type: none"> ・「10の姿」の育ち / 社会情動スキルの育ち / 基本的な生活習慣の育ち 等 ○Web研究発表会を実施し、実践者、運営指導委員、参加者から評価を得、成果と課題を整理する。 ○教職員への聞き取り調査や自己評価、保育記録の変化、日々の保育から資質向上の取組の有効性を検証する
第三年次	<ul style="list-style-type: none"> ○編成した教育課程、指導計画等に基づく保育実践、保育記録を省察する。 ○運営指導委員会で意見を得、改善に生かす。 <ul style="list-style-type: none"> ・各学年の教育課程（2歳～5歳）の有効性と課題 / 教育課程と学びの連続性を意識した保育の展開 ○就学先小学校との連絡協議会、聞き取り調査を実施し、子どもの育ちの姿から評価を得る。 ○保護者対象の子どもの実態調査（「子どもの心と体の育ち」等）を、経年比較、分析を行う。 <ul style="list-style-type: none"> ・「10の姿」の育ち / 社会情動スキルの育ち / 基本的な生活習慣の育ち 等 ○Web研究発表会を実施し、実践者、運営指導委員、参加者から評価を得、成果と課題を整理する。 ○教職員への聞き取り調査や自己評価、保育記録の変化、日々の保育から資質向上の取組の有効性を検証する。
第四年次	<ul style="list-style-type: none"> ○編成した教育課程、指導計画等に基づく保育実践、保育記録を省察する。 ○運営指導委員会で意見を得、改善に生かす。 <ul style="list-style-type: none"> ・編成した0歳児から5歳児教育課程及び、指導計画の連続性及び課題 / 資質向上に向けた取組 / 4年間の研究内容 ○就学先小学校へのアンケート調査、聞き取り調査、連絡協議会において、子どもの育ちの姿から評価を得る。 ○保護者対象の子どもの実態調査（「子どもの心と体の育ち」等）を、経年比較、分析を行う。 <ul style="list-style-type: none"> ・「10の姿」の育ち / 社会情動スキルの育ち / 基本的な生活習慣の育ち 等 ○公開保育研究会を実施し、実践者、運営指導委員、参加者から評価を得る。 ○教職員への聞き取り調査や自己評価、保育記録の変化、日々の保育から資質向上の取組の有効性を集約する。

5 研究開発の成果

(1) 幼児へ効果

5領域の視点から教育課程を編成し、設定したねらいと内容に沿って保育を計画し、「子ども主体の保育実践」に努め、活動中に見られた子どもの姿から「10の姿」の育ちを読み取って保育改善に生かしてきた。それにより、子どもが、意欲的・主体的に取り組み、遊びを楽しみながら友達との関係を深めたり、自分で考えたり工夫したりしながら活動や学びを広げ、深める姿につながった。その学びを「10の姿」から捉えると、「自分が選んだ遊びに、身体を伸び伸びと動かして取り組んでいる。運動に目標をもって取り組む子どもが増え、達成感や充実感を味わっている。生活や遊びに見通しがもてるようになり、生活習慣が身に付いてきた」（健康な心と体）、「興味をもった事について『なぜ?』『こうしたらいいんじゃない』等と自分なりに考えて試すことや、失敗した理由を考えて工夫することを楽しんでいる。図鑑やタブレットで調べて、分かる喜びを味わった」（思考力の芽生え）、「昆虫や多様な植物に触れ、自然物を使って工夫して遊ぶことを楽しみ、不思議さや面白さを感じている。大切に育てる気持ちや態度が育ち、気づきや遊びを広げている」（自然との関わり、生命尊重）、「絵本やお話から興味を広げ、経験や思いを言葉で表現することを楽しみ、発想を広げている。子ども同士の対話を大切にしたことから、言葉で伝える力が育ってきた」（言葉による伝え合い）、「異年齢の友達との関わりから思いやりや優しさが育ってきた」（道徳性・規範意識の芽生え）等の具体的な姿が見られた。

3つの資質・能力の視点から見ると、「思考力・判断力・表現力等の基礎」の育ちが最も高く、子ども達が遊びや生活の中で、自分で発見したり、試行錯誤や工夫をしたり、表現に工夫や創造性をもって取り組んでいることの表れであると捉えた。また、想像した通りにならなかったことを不思議に思い、なぜ失敗したのかを考えて工夫しながら遊びを発展させる姿や、もっとよいものにしようと話し合っ工夫する姿に育ちが見られた。「知識や技能の基礎」の育ちとして、鉄棒や登り棒に繰り返し挑戦してうまくできる体の動かし方を体得する、種の数や幼虫の長さを調べて表に表す、どの場所の土から一番硬い泥団子ができるかを見付ける等、遊びを通して自然物の性質や身体の働きに関する知識を身に付けることができた。体を動かす遊びにおける目標の達成度も高い。安全に関する知識や自分の行動への見通しについては個人差が大きく、保育の工夫が必要である。「学びに向かう力」に関しては、自分で選んだ遊びに積極的に取り組み、3歳児では友達と活動を楽しみ、自分なりに遊びを楽しくしようと工夫する姿に、5歳児では友達と共通の目的に向かって取り組んで達成感を味わう姿から育ちが伺われた。日常的に展開される友達や異年齢児との温かい関わりから、思いやる心が育っている。何れの育ちにも個人差が見られることを踏まえ、子どもの姿を捉えて保育を工夫し、高めていく必要がある。

（2）教師への効果

研究を通して「教育課程を意識した保育」「主体的活動を促し、活動や学びを広げる環境構成と援助の工夫」「一人ひとりの学びに目を向けて子どもの育ちを読み取る力」等の向上が図られた。教育課程の理解、指導計画との関係、子ども理解から始めた研究であったが、子どもが楽しんでいる姿に満足していた保育が、教育課程のねらいや内容を理解して子どもの育ちや学びを捉え、発達に即した具体的なねらいと内容を設定し、適当な援助や環境構成、再構成を工夫する保育に変容した。1歳児以上の教育課程は、5領域からねらいと内容を設定した。これによって、教育課程に基づいた指導計画（年間計画⇒月案⇒週案⇒日案）を立案し、ねらいを意識して保育を行い、それを評価して翌月（週、日）の指導計画に生かすカリキュラムマネジメントが定着してきたといえる。また、担当する学年だけでなく、他学年や系列園の指導計画や保育実践に目を通し、学びの連続性を意識して保育を行うようになった。それとともに、教職員間に気軽に相談し合う風土が広がったことも成果である。子どもの主体性と保育者の意図とをバランスよく絡ませることはまだ課題があるが、主体的な活動への理解が進み、育てる力の見通しをもって保育を行うことで子どもへの関わりが変わり、活動や学びが深まることを保育者自身が実感している。

可視化した保育記録エピソード記録、マンスリー・エピソードへの取組により、「10の姿」の視点で育ちを読み取ることが日常化し、子ども一人ひとりに目を向けて「学び」や「育ち」の姿を記録し、個人と全体の育ちを捉えるようになった。「10の姿」の捉えも、「言葉のやり取りがあったから『言葉による伝え合い』」と短絡的に当てはめていたものが、年齢相応の育ちが見られたか、展開された活動、環境構成、援助は適切であったかを振り返って評価するようになった。このことから、PDCAサイクルに

よるカリキュラムマネジメントが行われるようになった。保育者の自己評価にも「研究を重ねるごとに、教育課程を念頭におき、子ども達の主体性を大切にしながら保育に取り組めるようになってきた。子どもの主体性を考えることで、集める保育ではなく、集まる保育を実現できるようになった」「教育課程や『10の姿』を意識して保育に取り組んできたことで、子どもに対する見方が変わった。自分の保育を俯瞰して見るようになった」といった感想を挙げている。

また、指導計画の形式の変更や研修時間の工夫等は、負担軽減につながった。

(3) 保護者等への効果

こども施設向け ICT システム「コドモン」、保育参観、懇談会、ふれあい帳（毎月、個人の育ちを保護者に伝えるファイル）で、研究開発に関する取組や保育を発信してきた。また、初年度より、全保護者を対象に「心と体の育ちに関するアンケート」（53項目：内、情意面の育ち14項目）、年長児保護者を対象に「『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』の育ちのアンケート」を実施した。保護者から「何かに取り組むときはどちらかというと受け身で、上手くできないとやる気も無くしがちでしたが、年長になると自分でダンボール工作を率先してやり、どうしたらより良くなるかを考えながら作業する様子が見られました。難しい作業も諦めずやっていてやり遂げる力がついたように感じます」といった感想が寄せられ、研究に関する取組が家庭に広がり、よい影響をもたらしていることが伺われた。アンケート自体が、保護者啓発や子育て支援につながっていることが伺われた。

(4) 今後の研究開発の方向性

① 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた教育課程の編成

(ア) 0歳児から5歳児の連続性を図った教育課程の編成、指導計画、保育実践

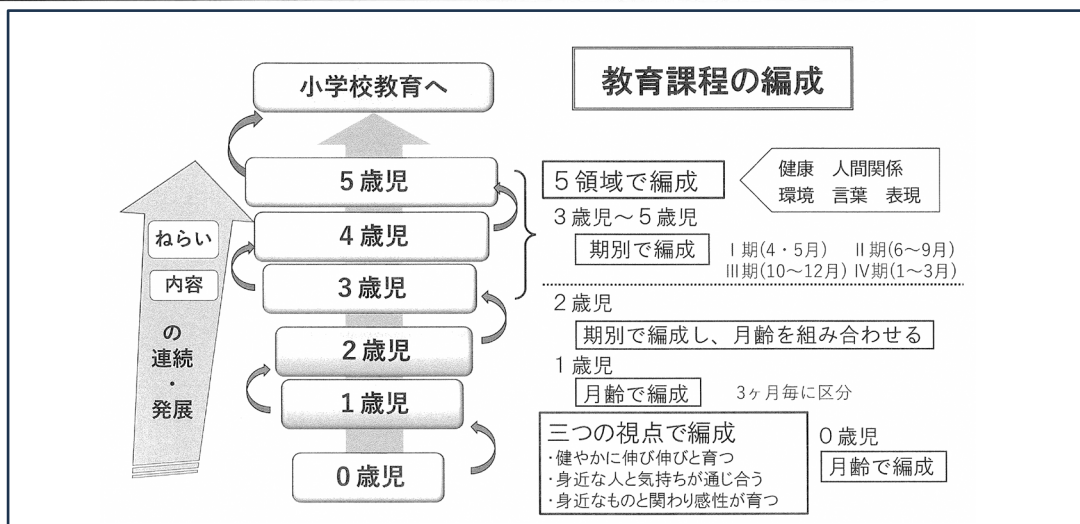
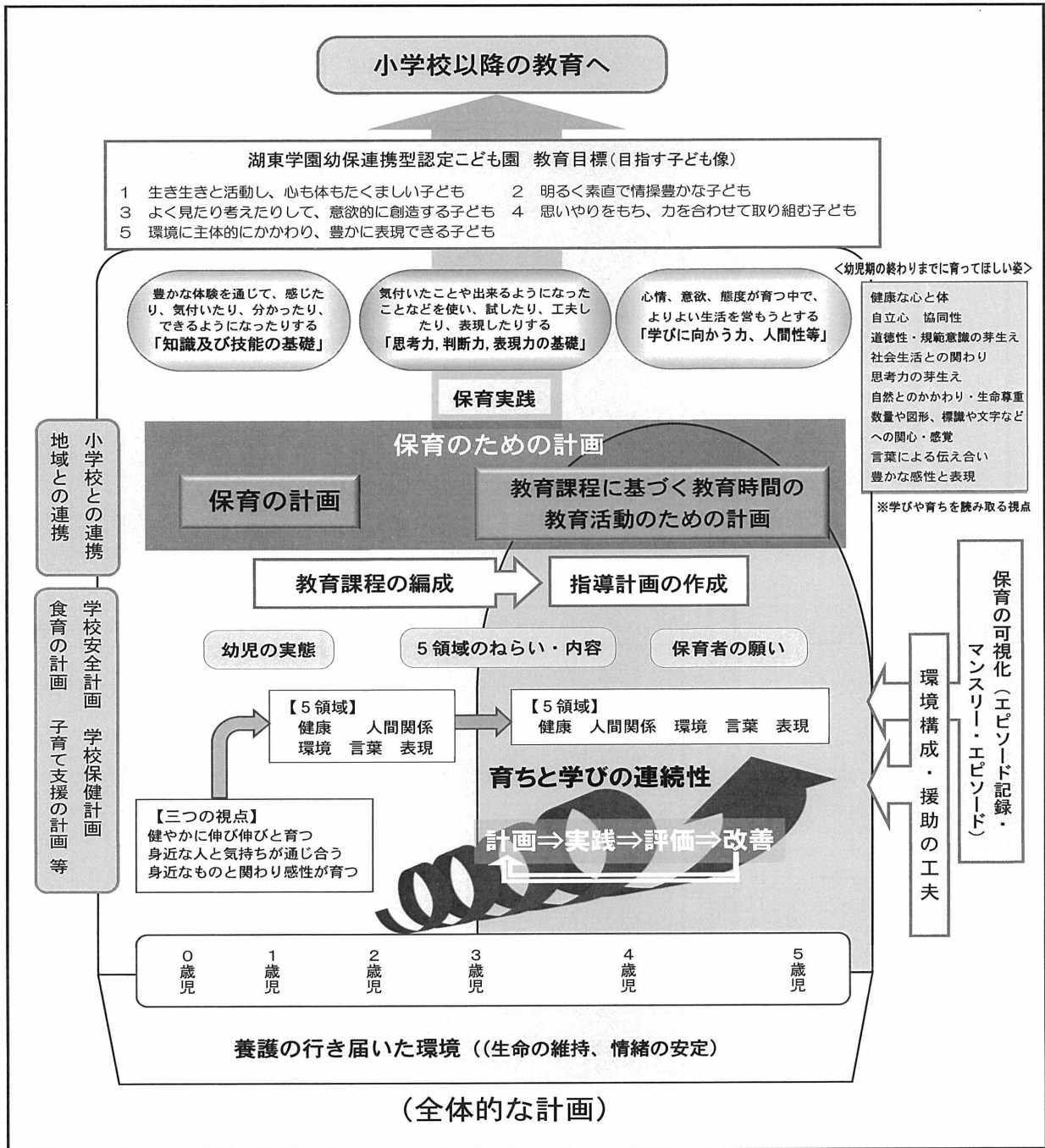
0歳児から5歳児、5歳児から小学校へのつながりに留意して教育課程を編成した。編成した教育課程について、育てる資質・能力の連続性の視点からさらに省察し、保育を通して改善を図る必要がある。コロナ禍の影響で不十分であった地域や保護者との連携を深め、共に子どもを育む社会に開かれた教育課程とする。子どもの姿は多様であり、月齢や発達による個人差も大きい。編成した学年の教育課程は、育ちの方向を示すものとして子どもの実態に応じて弾力的に取り扱っているが、小学校への接続を考えた時、一人ひとりの子どもに基盤となる力を育むために、それぞれの年齢で育てたい力の系統性を見直しをもち、指導計画具体的な保育の充実を図る必要がある。エピソード記録、マンスリー・エピソードへの取組は保育者の資質・能力を高める上で有効であるため継続し、0歳児、1歳児にも可能な限り広げて育ちと学びの連続性の視点から考察を加える。生活や遊びのルールは理解しているものの夢中になると忘れる、他者を受け入れられず自分の気持ちを通そうとする等、情意面の育ちに課題が見られるため、保育の方法や保育者の関わりを工夫するとともに保護者と連携して取り組みたい。

② 小学校への連続性を図る保育、学びと育ちをつなぐ小学校との連携

5歳児は、幼児期に遊び込んだ体験や学びが小学校にどのようなつながるかを意識して保育を行い、「10の姿」と小学校の教科等へのつながりから子ども成長を捉えてきた。しかし、園での学びが小学校の学びへ本当につながっているのかの検証は難しい。就学先の小学校の1年生担任等と共通の視点をもって協議を行い、様々な意見を得たが、幼児教育に生かすことのできる内容であった。今後、アプローチカリキュラムを明確なものにして、幼保小間で子どもの学びの接続性の視点での話し合いを重ね、円滑な接続が図られるようにする必要がある。就学先の小学校は多岐に渡るため、園の教育課程や保育の充実と小学校への啓発が「幼保小架け橋プログラム」の実現につながると捉えている。

③ 教職員の資質向上について

教育課程、各指導計画の連動、連続が浸透し、ねらい、内容を意識した保育や、保育を評価してねらいや環境構成、援助の改善を行うカリキュラムマネジメントが、保育者に定着した。しかし、翌日、翌週、翌月の指導に関する改善に留まり、教育課程の改善に生かすことに個人差が見られた。実践を持ち寄った保育カンファレンス等で省察することが、研修意欲を高め、保育力の向上に有効であったことから、取組を継続して保育力の向上を図る。「学びは、全体ではなく個に成立しなければならない」という考えに立ち、個に焦点を当てた保育記録で「10の姿」からの育ちを読み取ってきたが、特別な支援を要する子どもを含め一人ひとりの子どものウェルビーイングの向上を目指し保育改善に取りみたい。



学校等の概要

1-1 園名、園長名

がっこうほうじん ことがくえん ようほ れんけいがたにんてい えん えんちよう もり としこ
 学校法人 湖東学園 幼保連携型認定こども園にしばる 園長 森 敏子

2-1 所在地、電話番号、FAX番号

熊本県熊本市東区新南部3丁目3番51号
 TEL (096) 382-1156 FAX (096) 382-1159

3-1 課程・学科・学年別幼児数、学級数

(こども園の場合)

0歳児		1歳児		2歳児		年少(3歳児)		年中(4歳児)		年長(5歳児)		計	
幼児数	学級数	幼児数	学級数	幼児数	学級数	幼児数	学級数	幼児数	学級数	幼児数	学級数	幼児数	学級数
11	1	18	1	23	2	33	2	51	2	59	2	195	10

4-1 教職員数

園長	副園長	主幹保育教諭	指導保育教諭	保育教諭	講師	准看護師	子育て支援員
1	0	1	2	23	0	2	2
管理栄養士	栄養士	事務職員	用務員	保育補助	環境安全員	計	
0	3	2	0	1	1	38	

1-2 園名、園長名

がっこうほうじん ことがくえん ようほ れんけいがたにんてい えん えんちよう はらだ さとみ
 学校法人 湖東学園 幼保連携型認定こども園こうとう 園長 原田 聡美

2-2 所在地、電話番号、FAX番号

熊本県熊本市東区湖東1丁目12-26
 TEL (096) 368-3144 FAX (096) 368-3305

3-2 課程・学科・学年別幼児数、学級数

(こども園の場合)

0歳児		1歳児		2歳児		年少(3歳児)		年中(4歳児)		年長(5歳児)		計	
幼児数	学級数	幼児数	学級数	幼児数	学級数	幼児数	学級数	幼児数	学級数	幼児数	学級数	幼児数	学級数
2	1	8	1	10	1	16	1	24	1	23	1	83	6

4-2 教職員数

園長	副園長	主幹保育教諭	指導保育教諭	保育教諭	講師	看護師	子育て支援員
1	0	1	2	7	0	2	1
栄養士	調理師	事務職員	用務員				計
兼務	1	2	0				17

1-3 園名、園長名

がっこうほうじん こうとうがくえん ようほれんけいがたにんてい えん えんちよう ひがし みつひろ
 学校法人 湖東学園 幼保連携型認定こども園 とうだいに 園長 東 光弘

2-3 所在地、電話番号、FAX番号

熊本県熊本市東区健軍3丁目36-14
 TEL (096) 368-2939 FAX (096) 368-2949

3-3 課程・学科・学年別幼児数、学級数

(こども園の場合)

0歳児		1歳児		2歳児		年少(3歳児)		年中(4歳児)		年長(5歳児)		計	
幼児数	学級数	幼児数	学級数	幼児数	学級数	幼児数	学級数	幼児数	学級数	幼児数	学級数	幼児数	学級数
2	1	6	1	8	1	14	1	23	1	24	1	77	6

4-3 教職員数

園長	副園長	主幹保育教諭	指導保育教諭	保育教諭	講師	看護師	子育て支援員
1	0	1	1	5	0	1	0
栄養士	事務職員	用務員	保育補助	環境安全員	調理師	調理員	計
兼務	3	0	0	1	1	1	16

1-4 園名、園長名

がっこうほうじん こうとうがくえん ようほれんけいがたにんてい えん えんちよう もりしのぶ
 学校法人 湖東学園 幼保連携型認定こども園 とうぶ 園長 森 忍

2-4 所在地、電話番号、FAX番号

熊本県熊本市東区花立5丁目4番93号
 TEL (096) 368-6423 FAX (096) 368-6425

3-4 課程・学科・学年別幼児数、学級数

(こども園の場合)

0歳児		1歳児		2歳児		年少(3歳児)		年中(4歳児)		年長(5歳児)		計	
幼児数	学級数	幼児数	学級数	幼児数	学級数	幼児数	学級数	幼児数	学級数	幼児数	学級数	幼児数	学級数
5	1	6	1	7	1	38	2	51	2	56	2	163	9

4-4 教職員数

園長	副園長	主幹保育教諭	指導保育教諭	保育教諭	講師	看護師	子育て支援員
1	0	2	0	9	0	1	0
栄養士	調理師	事務職員	用務員	環境安全員			計
兼務	1	2	0	1			17